

# 自分自身の方法として M-GTAを獲得する

評者

西村 ユミ

東京都立大学大学院人間健康科学研究科看護科学域教授

## Book Review

### 定本 M-GTA

実践の理論化をめざす  
質的研究方法論

著：木下康仁



A5判・400ページ

定価：3,520円

(本体3,200円+税10%)

発行：医学書院 (03-3817-5650)

本書は、M-GTAの「定本」とある通り、著者である木下氏がオリジナル版GTAに触発され、30年にわたる試行錯誤を経て到達した決定版である。また、「M-GTAを論ずることは質的研究を論ずること」と謳い、質的研究固有の人間観と理論的基盤をもとに方法論を構築した斬新な書籍である。

定本とされる理由は、本書の構成が物語っている。4部構成のPart1では、M-GTAの基本特性と方法論的基盤について、オリジナル版GTAからいかに抜本的に再編成したのかが、その根拠とともに説得的に論じられる。Part2では、分析方法と分析プロセスが詳細に説明されるが、単なる手順ではない。例えば、GTAは参加観察による調査から構築されたが、現在、多くのGTA研究はインタビューをデータとする。両者のデータの質の違いを根拠に、データの性質に応じた方法論が再構成され説明される。Part3では、学習方法としてのグループワークの仕方が提案される。グループでの学習は質的研究には不可欠であり、すでに行なわれているであろうが、そこで何が起り得るのかが分析されることで、意義が明確になる。最後のPart4では、視点を“領域化”した質的研究に向け、コーディングや査読のあり方、批判的実在論との関係からM-GTAの可能性が検討される。

この構成から、1つの研究方法論であるM-GTAを論じていくと、多分野を横断して1つの領域となった質的研究を論じる必然性も伝わってくる。またこの過程で、著者が取り組んだ「高齢夫婦世帯における夫による妻の介護プロセスの研究」が例示され、それを追っていくと、データから何に気づくことで分析となるのかがよくわかる。興味深いことに、データからの発見という分析の醍醐味も経験できる。木下氏は、評者が取り組む現象学的研究の解釈では、現象学的還元が行なわれているのではないかと読み取る。他者がデータを解釈する思考と、そこではつきり自覚せずに行なっていることまでもを見て取る著者の眼力が為せる技だ。それを辿れば、質的研究を進めている感覚が味わえるのも納得できる。

それは、木下氏が【研究する人間】という概念を提案し、研究者を方法論に組み入れようとするとも関係する。なるほどと思わされるのは、研究を1つの社会的活動として位置づけ、【研究する人間】が調査協力者、分析焦点者、結果の応用者という他者との間で3種類のインタラクティブを経験するという点だ。社会的活動と研究活動を分離させない。それは、オリジナル

版M-GTAから生まれた課題を乗り越える装置としても機能する。GTAはその内部に量的研究の価値観をもち、それが、領域化した質的研究から批判された。原点に戻って、この批判に応じる過程において、自然科学と社会構成主義の対立構図を乗り越える必要性に迫られ、「三位相のインタラクティブ性」という方法論の体系化を図った。「分析テーマ」「分析焦点者」そして「研究する人間」のインタラクティブという視点である。分析テーマという目的をもち、調査協力者と関わり分析を進めると、分析焦点者という別の水準の視点からの変化(うごき)＝“プロセス”が見えてくる。この妥当性は継続比較分析をしながら検証される。これを推し進めるのは【研究する人間】であり、構築されるのが理論である。いや、創られつつある理論を検証しつつ理論を構築し、さらにその理論の応用によって創造的に修正される。これらすべてが方法論に組み込まれていることには、唸らされた。定本とされるゆえんである。

しかし、本書は完結してはいない。方法論に“余白”を設け、M-GTAを通して自らの方法を創造して修正していく姿勢を求める著者だからこそ、質的研究のメタ理論として批判的実在論の可能性を模索したまま本書を閉じる。本書において、「行為文脈設定型実装研究」と命名したM-GTAが実装によって理論を検証し続けるのと同様に、方法論においても思索と検証を続けようとする決意が私にははっきり伝わってきた。